

未来を切り拓く一冊

『全盲の僕が弁護士になった理由 あきらめない心の鍛え方』
大胡田 誠(おおごだ まこと)著(日経 BP 社)



著者の大胡田誠さんは、全盲で司法試験に合格した3人目の弁護士です。司法試験と言えば日本で最難関の国家試験。視覚的なハンディキャップがなくても難しい試験なのに、情報の取得が困難な全盲の方にとっては想像を絶するような道です。そんな司法試験にチャレンジし、弁護士になろうと思ったのはなぜだったのでしょうか。そして、次から次に降りかかってくる困難をどう乗り越えていったのでしょうか。

「あきらめない心」を鍛えるための考え方が満載の一冊。今回はその中身をほんの少しだけ紹介します。

弁護士を目指したきっかけ

大胡田さんは小学6年生の時に視力を失いました。目が悪いことで特別視されることを嫌がっていた大胡田さんは視界が完全に霧(もや)で覆われたことで、初めて絶望を味わいました。自意識がどんどん膨らみ、友人たちと交わることができなくなったそうです。そしてそのまま故郷に留まることはどうしてもできず、東京の筑波大学附属盲学校の中学部に進学しました。転機が訪れたのは中学2年生の時でした。偶然、手にした一冊の本が大胡田さんの人生を変えました。それは日本で初めて点字で司法試験に合格した竹下義樹さんの手記でした。それを読んだ大胡田さんは大きな衝撃を受けました。「視覚障がいがあっても、あきらめさえないければ、健常者と肩を並べて生きていくことができる。そればかりか、自分の力で社会的に弱い立場に立たされている人を助けることもできることを教えられた。そして何とかして僕も弁護士になりたいと思った。」のだそうです。

悔しさをバネにした大学受験

弁護士を目指した大胡田さんは一浪の末、慶應義塾大学の法学部に合格しました。自身の努力はもちろんありましたが、合格の可能性を少しでも高めるために、科目選択の段階で、クレバーで戦術的な工夫もありました。アルファベットが点字と完全に対応している英語、練習すれば上達する小論文、子供のころから興味があった世界史を選んだそうです。点訳ボランティアや盲学校のバックアップなども合格を後押ししてくれました。視覚障害を理由に受験さえ認められない大学もあり、非常に悔しい思いもした大胡田さんですが、その悔しさをバネに勉強に打ち込んだそうです。大学では、サークル、スポーツ、遊びと随分満喫した(?)ようです。もちろん弁護士になる夢も忘れておらず、レポートをこなし、司法試験予備校に通うなど勉学にも勤しみました。しかし、初めての司法試験ではあえなく撃沈。実家に戻り、長い長い戦いが始まりました。

司法試験合格まで

実家で孤独に勉強を続けた大胡田さんでしたが、幾度も司法試験という高く厚い壁に跳ね返されてしまいました。4回目の受験に失敗した後、さすがに心が折れかけたそうですが、お母さんから「人生で迷ったときには、自分の心が『温かい』と思う方を選びなさい。」と教えられ、心の欲するままに、それが地獄だとしても夢に近づく方を選びました。大胡田さんはロースクールに入学し、勉強を続けました。そして2006年、5回目のチャレンジで見事に司法試験に合格しました。この時もボランティアを買って出てくれた仲間たちや家族、恋人など周囲の人たちが応援してくれました。また、大胡田さん自身が法務省に掛け合っ、より素早く解答ができる、パソコンでの受験を許可してもらったことも大きかったようです。

気持ちが生み出す大きな力

司法試験における周囲を巻き込んだ動きはとてもダイナミックなものでしたが、こうした周りをも動かす力はなぜ生まれたのでしょうか。この大きな力の真ん中には、弁護士になってやるぞ!という大胡田さんのあきらめることのできない強い気持ちがありました。それが大きなうねりとなって自分自身や周囲、法務省さえも突き動かすとても大きな回転運動になっていったのではないのでしょうか。

あきらめる、あきらめない

障害を理由にあきらめることはたくさんあると思いますが、それは健常者でも本質的には同様なことだと思います。普段生活をしていて、それとなく心に浮かんだ希望や欲求を、何気なく刹那的にあきらめていることが多くあります。例えば海外旅行。テレビで海外の特集が流れた時に「行きたいなあ。でも英語が苦手だし、治安も悪そうだし。」とすぐに欲求を消してしまいます。将来についても「通訳の仕事ってカッコいいな。でも人前で話すのが苦手。勉強も苦手。」などと困難を理由にその道を断ってしまうことがあると思います。こういったあきらめはどんな人にも日常的に起こっていますが、視覚障害があれば、より当たり前のように、より高頻度で起こってしまうものだと思います。それを文字にすると「目が見えづらいと初めての所は危険だから。」「英語は好きだけど、見えないから無理だよなあ。」となり、健常者のあきらめとあまり大差がないように思えてしまいます。もちろんそれを克服するための努力や工夫の量は間違いだとは思いますが、そんな場面に何度も出くわした大胡田さんはこのように考えています。

「『見えないならどうやったらできるだろう』、
そんな風に考える癖がいつの間にか身についていた」

「したい」「なりたい」という欲求や夢を大切に、困難が降りかかっても、それをむしろ「おもしろい」と感じ、「どう克服するか」を考え、乗り越えてきた経験が綴られたこの手記。読み終えた後、もう少しだけ自分の気持ちを大切に育てたいと思うようになりました。学校の図書室やサピエにもありますので、ぜひご一読ください。